

学、医療知識がたとえ一部の者にはあつたにせよわが国に伝えられ、長崎を訪れた讃岐の医師、合田求吾、大兄兄弟が蘭訳士吉雄耕牛、芦風兄弟からオランダ商館を通して得た蘭書を聴きとり、それを記録として残していることを二回に亘つて貴誌に掲載した。

縁あつて合田大介のご子孫、合田慶助氏と知己を得、数回同氏と交信している間に、慶助氏は同家に所蔵されているご先祖の書類をすべて整理された上リストを作られ、その中には吉雄兄弟と合田兄弟との間に交された書簡もありその入手を希望したところ、それも含めて頂戴した。しかし流暢な古文は私には読めないので知友、西宮秀紀氏(愛知県立大文学部)に解説をお願いしたところ、西宮氏は大学時代の後輩遠山佳治氏(名古屋女子短大)にそれを依頼され、現代文化された四通をご送りいただき、現在わが家に保存している。

内容には私信に亘ることも書かれているが、医学史にとつて貴重な資料かと思えます。合田慶助氏その他の方々のご諒解が得られれば、現代文を含めた四通を提出したいと考えておりますが如何なものでありましようか。

関係者の住所所属は左記の通りです。

合田慶助 〒763-0000 丸亀市風袋町一三一

西宮秀紀 〒464-0083 名古屋市千種区北千種二一-四三

萱場住宅二一-二〇一

(愛知県立大学文学部教授)

遠山佳治 〒444-0840 岡崎市戸崎町上り場西三-四

(名古屋女子短期大学)

## 24

濱 中 淑 彦

我国における医史資料の蒐集・保存の現状は、欧米に比べると月と蠶と皮肉らざるを得ないほど貧困な医史学教育とともに、誠にお寒い状況にあることについてはあらためて贅言を要しないであろう。周知の通り、欧米では大学に医学史講座が設けられているのが原則(科学史、Medical Humanitiesの一部門の場合もあり、最近では医学倫理も担当)であり、多くの場合に医学博物館を併設して医学教育、市民啓蒙にも寄与していることは訪欧の機会によく見かけることである。手元の資料によれば European Association of Museums of the History of Medical Sciences (一九八九年の時点で名誉会長はリヨンの Dr. Ch. Merieux、会長は Wellcome Institute の Dr. B. Bracegirdle) とふう連合組織す

ら活動して、独自の Bulletin (一九八九年で No.10、一九九六年は No.22) を刊行して現在に至っている。新制大学として一九五〇年に再発足した本学(名古屋市立大学)医学部では、一九五二―一六〇年に新美保三講師により医学史講義が行われた記録が残っているが、その後この種の講義は全く途絶えていた。その背景には、戦後の高度成長(経済、技術優先)の思想と並行して、医学界でも「先端」医学重視の至上命令があり、医学史を顧みる暇など全くなかった我国全体の国情を無視することができないであろう。一九五六―一七八年までほぼ一貫して三〇年余り在籍した京都大学でも、医学史の講義は一度として行われたことはなかったし、一九〇九年の富士川游先生の医学史講義や、医学部図書館所蔵の「富士川文庫」のことすら、平均的な教員、学生の関知する所ではなかった。

さて数年前に大学教養課程が廃止された機会に、多くの他大学医学部同様、本学でも三年前から第一学年の半年間、週二コマ(一コマ九〇分)があてられる「医学概論」の一部として四く五コマが医学史の講義に割かれるようになってはいるが、これだけの時間では何をどうしてよいか、途方に暮れるばかりである。医学史博物館でもあれば、一度は学生を案内して、せめて余暇に見学を勧めることもできよ

うが、現状では夏休みに外国旅行をする機会にでも欧米の医学史博物館を見学できるようにと、資料を渡すのが関の山である。色々思いあぐねた結果、同志の教官と語らって本年度から、さしあたり非公式ながら「医学資料保存・展示委員会」を提案・発足させて、「医学史年表と疾病分類史」の展示を一カ月余り行うなどの活動を開始した。たまたま本学は二〇〇〇年に開学五〇年の記念事業を行う予定があるので「医学部史料編纂室」を、また名古屋市が二〇一〇年からの新世紀計画の立案を開始したので、「先端医学総合センター」の一部として、「医学資料管理室」を医学部案に盛り込むことまではできたが、どちらも筆者らの定年退職後のことになるので、甚だ心もとない次第である。この種の活動や既存の医学史料室を全国規模で連携させることができないうか、というのが一地方大学からの個人的な一提案である。